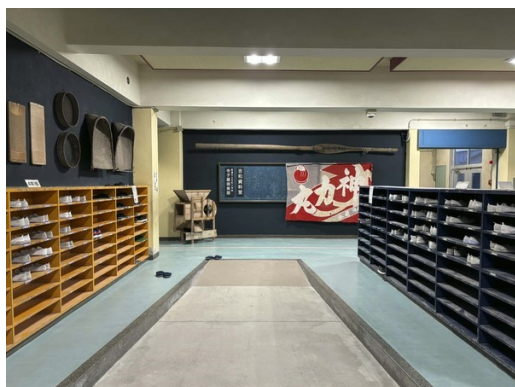


2025年度 研究成果報告書

所属機関名	九州大学 芸術工学研究院
申請者氏名	横谷 奈歩
分担者氏名	小野環
研究課題名	小学校内の郷土資料館設立と芸術を用いた地域文化継承のための実践研究



玄関入り口の空間も、資料室の一部として設置



プレ公開日に4年生の教室にて、星劇団レクチャーをする横谷



資料室内の六角井戸、祠（吉和地域に実在）の前で説明をする小野



講師の砂山が、ワークショップ内容について説明

【研究の概要】

本研究は、地域の文化資源と芸術的手法を融合し、教育現場と地域コミュニティを結びつける実践的教育研究である。

教育と芸術を分けるのではなく、両者を同じ場で交差させることを目的とした。戦後、尾道市吉和地区で若い女性たちによって結成された「星劇団」を研究の基盤とし、申請者が2022年に実施した「星劇団再演プロジェクト」で得られた資料や舞台美術、地域住民から寄贈された民具・写真、小学校の歴史資料などを活用して、尾道市立吉和小学校の空き教室に吉和資料室を設置。廃棄予定であった跳び箱や机を展示什器として再利用したユニークな空間を制作し、子どもたちが日常的に地域文化へ触れられる環境を整備した。プレオープンでは資料室ツアーを行い、吉和の歴史を身体で表現するワークショップを開催することで、地域の歴史や記憶を、身体で感じ、学ぶ体験を行った。また、地域の方へのツアーにも組み込み、子どもたちとの交流の場にも繋げる試みをした。本研究は、郷土資料館を単なる保存施設ではなく、地域文化を未来へ継承し、新たな創造へとつなぐ教育空間として位置付け、教育・芸術・地域社会を結ぶ新たな実践知の創出を目指した。

【研究の内容及び成果の詳細】

1. 研究内容及び成果（本研究によって得られた新知見、成果等）

本研究は、小学校内に郷土資料館を設置し、芸術の実践を通して地域文化を継承する新たな教育モデルを構築することを目的として実施した。従来、郷土資料館は地域資料を保存・展示する施設として位置づけられることが多いが、本研究では資料を保存すること自体を目的とするのではなく、子どもたちが地域の歴史や文化を身体的に経験し、世代間交流を通して地域の記憶を未来へ受け渡す「教育空間」として再構成することを試みた。教育と芸術を同じ場で交差させることによって、文化継承の新たな方法を提示することが本研究の中心的な課題であった。

研究の基盤となったのは、尾道市吉和地区で終戦直後に若い女性たちによって結成された素人劇団「星劇団」である。私は2022年3月、元団員への聞き取り調査をもとに地域住民と協働し、「星劇団再演プロジェクト」を吉和漁港に仮設舞台を作り、実施した。このプロジェクトには地域の子どもたちも参加し、演劇を通して地域の歴史に触れる機会を創出した。この経験から、芸術は地域文化を単に再現するものではなく、人々の記憶を現在へ呼び戻し、新たな世代へ継承する媒介となり得ることを実感した。本研究は、その実践を小学校教育へ接続する試みとして位置づけられる。

吉和小学校内に設立した吉和資料室では、星劇団再演プロジェクトで使用した舞台美術や大道具、小学校で廃棄予定であった跳び箱や机などを再利用し、展示空間そのものを一つの芸術作品として構成した。一般的な博物館や資料館のように展示ケースに資料を並べるのではなく、迷路のようなユニークな空間を、子どもたちが自由に歩き回り、座り、眺め、語り合える空間としたことで、展示物は「見る対象」から「関わる対象」へと変化した。地域で使われていた民具や写真、星劇団に関する資料、小学校の歴史資料などが一つの空間に共存することで、異なる時代の記憶が重なり合い、地域文化を多面的に理解できる環境を整えることができた。

資料室のプレオープンでは、授業時間を利用して小学生を資料室へ案内し、展示物を巡るツアーを実施した。子どもたちは展示を受動的に見学するのではなく、「これは誰が使っていたのか」「なぜ学校にあるのか」といった疑問を自ら投げかけ、教員や地域住民との対話を通して展示の意味を考える姿が見られた。展示資料は単なる歴史資料ではなく、子どもたち自身が地域との関係を考えるための教材として機能していた。このことから、学校という日常空間の中に地域文化が存在すること自体が、主体的な学びを促す教育環境となることが確認できた。

さらに、資料室オープニングに合わせて実施したワークショップでは、高学年児童約50名が参加し、資料室の見学と身体表現を組み合わせたプログラムを展開した。講師に、星劇団再演プロジェクトでも出演、舞台監修を行った世界的なパフォーマー、砂山典子氏を招聘し、参加者の子どもたちは資料室で地域の歴史や星劇団の活動を知った後、その印象を身体表現や、アルミホイルなど身近な素材を使って衣装や小道具を作る創作活動へと発展させた。展示資料を「知識」として理解するだけではなく、自らの身体や創造的な表現へ置き換える過程を通して、地域文化を自分自身の経験として捉え直していた。この実践は、郷土学習を知識伝達型の学習から創造的な学習へ転換する可能性を示すものであった。

また、本研究では資料室の制作過程そのものも重要な研究対象となった。展示の準備段階では、地域住民から写真や資料の提供を受け、教職員や大学関係者、民俗学・建築・美術の専門家と協働しながら空間を制作した。地域住民が自ら資料を持ち寄り、その意味を語り、展示づくりに参加する過程は、資料収集ではなく「地域の記憶を共有する場」として機能した。資料館は完成した施設ではなく、地域の人々が関わり続けることで更新される空間であることが明らかとなった。

本研究を通して得られた最も大きな知見は、郷土資料館は地域資料を保存する施設ではなく、人々の記憶を世代間で継承しながら循環させる教育空間となり得ることである。芸術は展示を美しく演出するための手法ではなく、地域文化を現在へとひらき、子どもたちが主体的に地域と関わるための媒介となった。資料を「保存」することから「活用」し、「継承」へとつなげる教育実践を小学校という日常空間の中で実現できたことは、本研究によって得られた新たな成果である。さらに、学校・地域住民・アーティスト・研究者が協働する実践を通して、地域文化は過去の遺産ではなく、未来へ向けて更新され続ける文化であることが示された。本研究は、教育・芸術・地域社会を横断する文化継承の新たな実践モデルを提示した点において、大きな意義を有すると考えている。

2. 今後の研究の見通し

本研究では、小学校内に郷土資料館を設置し、芸術を媒介として地域文化を継承する実践を行うことで、学校が地域の記憶を未来へつなぐ教育空間として機能する可能性を明らかにした。一方で、この実践は完成形ではなく、継続的な活動の中で検証を重ねるべき多くの課題も見えてきた。今後は、本研究で得られた成果を基盤としながら、地域文化の継承を教育実践としてどのように定着させていくかを主題として研究を発展させていきたい。

第一に取り組みたいのは、吉和資料室を一過性の展示施設ではなく、子どもたちの日常的な学習環境として活用する方法の検討である。本研究では、プレオープンでの見学やオープニングイベント、ワークショップなどを通して、子どもたちが地域文化に主体的に関わる姿が見られた。しかし、その学びを一度限りの体験で終わらせず、学校生活の中で継続的に地域文化へ触れる機会をどのように設計するかは、今後の重要な課題である。総合的な学習の時間や、他の従来の科目などと資料室を結び付けることで、地域文化を横断的に学ぶ教育プログラムの構築を進めたい。

第二に、地域住民の方々との協働をさらに深化させたい。本研究では、地域住民から写真や民具、学校資料などの提供を受けるだけでなく、それらにまつわる記憶や経験を共有しながら展示づくりを進めた。この過程は、資料を収集すること以上に、地域の歴史を語り合う機会そのものに大きな意味があった。今後は、資料の追加収集だけでなく、住民への聞き取り調査や映像記録、生活文化の記録化なども進め、地域の「もの」だけではなく「語り」や「経験」も資料室に蓄積していきたい。こうした活動は、学校教育と地域研究を結び付ける新たなアーカイブの形成にもつながると考えている。

第三に、芸術実践を教育研究としてさらに体系化することを目指したい。本研究では、展示見学の後には身体表現を取り入れたワークショップを実施することで、地域文化を知識として理解するだけでなく、自らの身体や創造活動を通して捉え直す学びが生まれた。この経験は、芸術が地域文化を表現する手段であるだけでなく、学びそのものを深める方法となる可能性を示している。今後は、演劇、美術、音楽など異なる芸術分野との連携も視野に入れながら、芸術を用いた地域学習の教育効果について継続的な実践と検証を行いたい。

また、本研究では、学校という公共空間の中に「吉和資料室」という郷土資料館を設置したこと自体が大きな特徴であった。従来の郷土資料館は、地域住民や観光客が目的を持って訪れる施設であることが多いが、学校内に設置することで、子どもたちは日常生活の中で自然に地域文化へ触れることができる環境が生まれた。この特徴は、人口減少や学校統廃合が進む地方において、学校施設を地域文化の拠点として活用する新たな可能性を示している。今後は、吉和地区で得られた成果を整理し、他地域への展開可能性についても検討していきたい。

さらに、本研究を通して、アーティストが教育や地域づくりに果たす役割についても新たな視点を得ることができた。これまでアーティストは作品を制作する存在として捉えられることが多かったが、本研究では、展示空間を設計し、人々の対話を促し、地域の記憶を可視化する役割を担った。今後は、アーティストが学校教育や地域文化の継承にどのような価値をもたらすことができるのかについても、実践を重ねながら検討していきたい。教育学や博物館学だけでは捉えきれない視点を芸術実践から提示することは、本研究の大きな可能性であると考えている。

研究成果については、資料室の継続的な運営と実践記録の蓄積を進めるとともに、学会や研究会での発表、論文執筆、展覧会などを通して広く社会へ発信していく予定である。また、子どもたちや地域住民との活動を継続的に記録し、その変化を長期的に観察することで、地域文化の継承が子どもたちの学びや地域への愛着にどのような影響を与えるのかについても検証を進めたい。

本研究を通して最も重要であったのは、郷土資料館を「過去を保存する場所」としてではなく、「未来の地域文化を育む場所」として位置付け直したことである。地域文化は保存されるだけでは継承されない。子どもたちが展示を見て、対話し、身体を動かし、自ら表現することによって初めて、自分自身の文化として受け止められる。本研究は、そのような文化継承の循環を学校という日常の場に生み出す第一歩となった。今後も芸術実践と教育研究を往還しながら、地域文化を未来へつなぐ持続可能な教育モデルの構築を目指して研究を継続していきたい。

3. 本年度の学会発表・論文、刊行物・著書名等（今後、発表等を予定しているものも含む。）

記録集「吉和資料室」全56ページ／ 企画：横谷奈歩、小野環 執筆：福島健作、田井静明、山根基嗣、小野環、横谷奈歩